

氏 名 清田 哲男

題 目 多感覚間相互作用と記憶による観察画表現の研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

美術・図画工作の授業において、観察による表現は最も一般的な題材であるといえる。写生や自画像など、観察によって感じたことを表現するためには、視覚だけではなく、描いている環境で感じるにおいや、対象の手触り、あるいは対象に関する記憶や知識、描く目的などを総合的に捉えることが重要となる。

しかし、視覚と触覚、または視覚と嗅覚を相互作用させて感じたことを表現した場合と、視覚のみで観察・表現した場合での、表現活動に見られる具体的な違いについてはまとまった研究がなされていない。また、対象への知識などの記憶と表現との関係、動機や目的と表現との関係も同様である。もし、仮にこれらに違いがあるとしたら、児童生徒の表現活動にどのように表れるのだろうか。

本研究では、児童生徒の観察画において、多感覚間相互作用を用いた場合の描画表現に表れる効果、及び、観察対象に関する知識や目的の量や質が表現活動にもたらす影響について考察を行うものである。

そのことによって、指導者にとっては児童生徒の作品の主題に一層寄り添った指導が可能となり、児童生徒にとっては、対象へのより深い共感を持って制作できるなどの実践的な教育効果が期待できよう。

研究の方法として、二つの調査と調査のための理論研究を行った。小学生、中学生を対象にした「多感覚間相互作用による観察と表現活動の関わりの調査」と、大学生を対象にした「記憶と動機づけによる観察と表現活動の関わりの調査」である。それぞれ、第4章、第5章で述べている。

さらに、調査の目的を明確にするため、観察による表現を三つの視座からのアプローチによって整理した。①観察による表現活動の歴史（第1章）、②視知覚など認知と表現との関係（第2章）、そして③美術教育研究での観察と表現との関係（第3章）である。

第1章では、西欧と仏教の自然観の違いなどを背景に、ダ・ヴィンチやセザンヌ、雪舟などを例に挙げ、観察に対する考えが作品にどのように表われるのかを検討した。ルネサンス期では、解剖図など普遍的な科学と結びつき、人間の外側で概念化された理想としての対象が描かれていたが、次第に表現すべき外界の真理が人間の内面の美として脳の中の現象として定位されていく流れを、観察と美術との関係を整理しつつ述べた。

第2章では、第1章での脳内での美の感じ方、視覚や認知の仕組みについてfMRIを使用した先行研究などから知見を集め、整理した。そのことで嗅覚—視覚、触覚—視覚などの多感覚間相互作用の組み合わせによる、脳の立体認識や空間認識で活性化する部位の傾向も明らかになった。さらに、嗅覚と長期記憶との関係なども含め、主に使用する感覚によって、観察する視点や想起する内容が異なることなども明らかになった。

第3章では、第1章で述べた西欧の自然観や概念に基づく絵画技法が、幕末に異なる文化圏である日本に入り、美術教育の描画指導法として明治以降の美術教育へ大きく反映されていく流れを、明治から昭和の社会背景を踏まえ整理した。また、発達段階に関する先行研究から、観察と表現に関わる知見を整理した。そこから、知覚による表現のプロセスでは動機や目的の重要性が明らかになった。

そして、第4章「多感覚間相互作用と観察との関係の調査」では、小学4年と中学2年の児童生徒を、嗅覚による表現体験を行ったグループと、触覚によって表現体験を行ったグループ、表現体験していないグループの3つのグループに分けて調査を行った。3つのグループに、同じ条件でハムスターと自由に触れ合ったあと、観察による描写表現をさせた。表現の感想や、描かれた対象物大きさ、背景の描画物などの分析を行い、さらに美術担当教員数十名による作品評価を行った。結果として、未体験のグループと比較し、嗅覚と触覚による表現体験のグループは、教員の評価において極めて高い評価を得ることとなった。また、ハムスターの背景に描かれた内容から触覚グループは観察で得た内容を、嗅覚グループは想像した世界を描く傾向が見られた。

一方、第5章「記憶と動機づけによる観察する対象の関係の調査」では、グループを4つにわけ、与えられた医学的な情報のある・なしと与えられた描く目的の情報のある・なしの四つの組み合わせでグループを4つにわけた。

4グループとも同じ条件で頭蓋のモデルを描き、描いた後の感想や、描画面積などの分析を行った。さらに、医師と看護師数十名が、絵としてよいと思う作品と、医学として使用できる作品を、ランダムに置かれた中から選択する調査を行った。結果として、医学情報が与えられず、描く目的を与えられたグループが最も高い選択率となった。また、両方とも与えられなかったグループが、絵としては高い選択率で、医学として使えるかについては、低い選択率になった。条件が与えられないことで自由な表現が可能となり、絵としての魅力が発揮され、高評価に結び付いたものと思われる。

以上のことから、観察による表現において、以下の3点の有効性を確認することができた。

- ①多感覚間相互作用の主體的な使用
- ②新しい情報による混乱を避けるとともに、対象についての長期記憶を賦活させること
- ③描くための明確な目的と動機

さらに、感覚が及ぼす表現への多様な影響も確認され、同時に感覚の種類ごとの表現への影響の傾向も明らかとなった。今後、児童生徒が生活環境で感じている感覚の組み合わせがもたらす表現活動への影響など、研究の広がり、深まりの可能性を秘めた成果が得られた。